

国際開発学会「工学と国際開発」研究部会主催
【適正技術シンポジウム：工学と国際開発の融合に向けて】に寄せて

国際開発学会会長
高橋基樹

国際開発学会「工学と国際開発」研究部会主催【適正技術シンポジウム：工学と国際開発の融合に向けて】にご出席、ご来場の皆様、本日はよくお越しいただきました。本来会場に参って、直接ご挨拶申し上げるべきですが、あいにく体調を崩し、自宅療養を余儀なくされていますので、座長である高田潤一先生に小生の挨拶を代読していただくことをお許し下さい。

国際開発学会は、途上国を中心とした開発問題に関して、異なる学問相互の垣根を超えて、学際的な対話と交流を通じた研究と教育の発展を図ることを主な目的のひとつとしています。それは、国際開発に関わって、既存の学問がそれぞれの専門に立てこもり、お互いの垣根を高くし、タコツボ化した状況を乗り越えることを意味しています。と言っても、とりわけ、学問間の垣根は理科系と文科系の間で非常に高く、それを乗り越えることは必ずしも容易ではありません。

タコツボ化という言葉の生みの親、政治学者・故丸山真男が数十年前に見抜いていたように学問の細分化と相互交流の無さは、欧米に比べて日本においてより深刻なようです。それは欧米の場合、社会に長く根付いていた哲学や理念を共有したうえで、学問が各専門分野に分化していったのに対して、日本は欧米でそうして専門別に分化していた各学問だけを輸入することで近代化を進めていったからだとされています。根っこにある哲学や理念を共有せずに、個別の学問だけ学ぶことがタコツボ化につながるという丸山の指摘は、ますます高度な専門化が進む日本の学問の現状を考える上で、今でも重要な意味をもっていますし、同時にそのことは、現代における途上国の抱える難しさについて深い示唆を与える指摘であろうと思います。

こうしたタコツボ化を乗り越えることは、たしかに、日本や途上国においてはより難しいことかもしれません。バラバラに導入され、発達したそれぞれのタコツボから、過去にさかのぼって強固で体系的な哲学や理念という共通の根っこを今から作り直すわけにはいかないからです。しかし、異なる学問が、一つの大きなテーマの下に、それぞれに成長しつつ、お互いを補足し、刺激し合いながら、一つの多様で豊かな森を形成することはできるのではないのでしょうか。そして、生態系は多様であるほうが、安定し、持続すると聞きます。とすれば、さまざまな学問分野を含む国際開発研究は、現代における国際開発と言う大きなテーマの下、理科系と文科系の間でも交流と対話を増やし、そのような豊かな森を形成することを目指したいと思います。

「工学と国際開発」研究部会が、4年間にわたり、進めてきた試みは、国際開発研究という森を形成するためのたいへん重要なものであると考えています。開発の議論はともすれば文科系主導になりがちですが、科学技術研究を専門とする工学研究者の皆さんが主導され、多くの議論を積み重ね、問題提起をされてきたことを、敬意を表するとともに、国際

開発学会会長として深く感謝いたします。そもそも、国際開発という現象の最も重要な出発点の一つは科学技術の発展ですが、近現代を通じた開発の国際的波及においても、技術の問題は、正と負の両面で中心的な課題であり続けてきました。そのことを考えても、技術研究を専門とする皆さんが、先頭に立って国際開発に関する考察を深め、発信を増やしてくださることは、国際開発研究の深まりのために無くてはならないことだと考えます。

そうしたことから言えば、今回、これまで積み重ねられた「工学と国際開発」研究部会の議論の成果を踏まえて、工学と国際開発の融合を目指し、「適正技術」をテーマとしたシンポジウムが開かれることは、素晴らしいことだと思います。「適正技術」の問題は、1960年代から70年代にかけてシューマッハーたちが提唱して以来、さまざまな議論と批判、そして実践を生みだしてきました。そして、その過程では、途上国をはじめとする各社会における、環境や資源面での持続性、技術水準の適合性、経済的な合理性、広い範囲の人々の利用可能性、貧困削減への貢献度など多くの意義が「適正技術」に込められてきました。しかし、どのような定義でも「適正技術」について変わらないのは、それぞれの社会がある技術を自らのあり方に馴染ませつつ、自分のものとして吸収し、持続的に利用していかれるかどうかという問題意識でしょう。それを語るには、技術そのものの内容の問題とともに、言うまでもなく、社会のあり方、具体的には、政治、制度、文化、生活習慣、あるいは宗教などの論点への目配りが欠かせないだろうと思います。これらの社会のあり方に関わる論点は通常、文科系の研究者がまず扱う問題であり、「適正技術」が、正に理科系の研究者が専門とする科学技術の領域と文科系の領域の両方にまたがるとても大きな問題であることがわかります。もちろんそのことは、国際開発研究全体に関しても言えます。理科系 イコール ハード、文科系 イコール ソフトと言った単純な二分法に立ち、互いを敬遠して、対話をしないという発想では、太刀打ちできない大きな課題、それが国際開発であり、その重要な論点である「適正技術」の問題だと思います。

本来であれば、シンポジウムに出席し、文科系の研究者の一員として、エキサイティングな議論に加わりたいと思いますが、体調を崩してそれができません。誠に残念であり、申し訳なく思います。ですが、今回の優れた登壇者の皆さまのお力と、「工学と国際開発」研究部会の今までの蓄積をもってすれば、きっと実りの多いシンポジウムとなるものと思います。

「工学と国際開発」研究部会に集う会員の皆さん、また技術と国際開発の問題に興味を持たれた参加者の皆さんの積極的なご参加によって、国際開発研究が、多様な学問分野の相互交流と対話により、今後、よりいっそう豊かな森として発展し深化していくことを願ってやみません。

最後になりますが、「工学と国際開発」研究部会の頻繁な開催と成果の丹念な蓄積・発信、また今回のシンポジウムの開催に当たって、たいへんご尽力をいただきました高田潤一先生、花岡伸也先生、そしてシンポジウムに登壇される内島光孝、浅尾卓司、田中直の各先生、その他全ての関係者の皆さんに心よりの感謝と敬意を表したいと思います。シンポジウムのご盛会・ご成功を祈っております。ありがとうございました。

2015年7月8日

国際開発学会会長 高橋基樹